

## 鹿児島の植物58

## 日本一多いレッドリスト植物種

植物担当 寺田 仁志

鹿児島県に自生する植物は約3,100種といわれています。これは全国のほぼ40%に当たります。鹿児島県はこれらの種のなかで植物標本データおよび研究者の現地情報をもとに鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物植物編を2003年度に作成しました。

これによると絶滅危惧1類，Ⅱ類，準絶滅危惧種，分布重要種等を含めると約2300種になり，自生種の約80%になります。また，環境省のレッドリストを比較しても鹿児島県は沖縄や北海道，長野などよりもはるかに多く日本一絶滅危惧植物が多い県です。

レッドリスト種が多い理由は以下のようにいわれています。

- ①鹿児島県は南北に長く島々が点在し，標高差も2000m近くあり，黒潮が近くを流れ，湿潤な多様な気候帯を含み自然豊かな海・山・川などの多様な環境を含むため植物種が多い。
- ②気候帯の境界に当たるため，南限種・北限種も多く，また，地史的な影響により植物種の隔離が起こり独特の進化を遂げたため固有種が多い。
- ③島々は面積が狭いため現在大繁茂している種も気候変動や外来種の侵入によって絶滅する可能性も高く不安定な生態系である本県のレッドリスト種は主に以下のような特徴を持った種群があります。

**南限種**

ブナやミズナラのような温帯性の落葉樹は南限となっている種が多く，近年の温暖化によって生育に適する標高が上昇し，種の存続が脅かされているものもあります。



ミズナラ

**北限種**

ツキイゲやオヒルギなど熱帯性の植物の中には潮流等によって偶然漂着し，定着した種も見られます。近年の温暖化によって台風は大型化し海岸浸食も厳しくなり，漂着した植

物の生息場所も少なくなっています。

**溪流植物**

急激に増水し激流となったかと思うと減水して乾燥する溪流辺には，根に葉緑体が移動したカワゴケソウ科植物や葉が流線形になって水への抵抗を少なくした植物群などが生えています。水質汚濁や水量など人為や気象の影響を強く受けています。

**氷河期からの生き残り植物**

氷河期にきびしい寒さを逃れて逃げ込んできたアマミイワウチワなどの植物種も温暖になった現在では北西向きの涼しい場所等に細々と生きています。



アマミイワウチワ

**草原の植物**

里地近くには農耕や運搬のため牛馬の飼料をとったり，屋根に葺くススキ等の茅をとるために草地が集落の近くにありました。社会が変わって茅等はいらなくなり，草原に人が入らなくなって森に変わったため，草原の植物は少なくなりました。

**湿地の植物**

湿地は埋め立てや水田開発等によって減少し，生育地が少なくなっていました。

**ツツジ科・ラン科の植物たち**

強風や火山活動によって高い木が生えないところになどにツツジ科の植物は鮮やかな花を咲かせます。また，ラン科植物は湿潤な照葉樹林の樹幹や林床に生えます。照葉樹林は伐採されその後スギやヒノキ林に変わりました。林床や木の幹に付いていたラン科植物は観賞用に山から持ち去られました。



ダルマエビネ（ラン科）

このように気候や人の営みの変化によってレッドリスト種の生育地が減少しています。